

ひょうご農産物のブランド化に向けた技術開発をめざす

本県は 2009 年度から「ひょうご農水産物ブランド戦略」の推進に取り組み、消費者の製品に対する評価と期待を高めるなど、産地づくりを通じた生産者の利益率の向上を目指している。また、近年、食の多様化が進む一方で温暖化による気候変動や肥料の流出防止による環境への負荷軽減、さらに労力軽減やコスト低減といった幅広い課題に対応するため、園芸作物の品種、作型、施肥方法、省力化等栽培法全体の見直しが緊急の課題となっている。

当センターはこれらの課題に対応し、消費者ニー

ズに応じた農産物の安定生産、高品質化など、製品毎のブランド化に向けた技術開発に取り組んでいる。ここでは、クリのかん水による収量増加技術、温暖化の下でのイチゴの開花安定技術、タマネギ新品種の安定生産技術、イチジクの低温障害回避技術など、園芸分野でのブランド戦略を支える技術のうち最近開発したものを紹介する。関係機関と共に、現地への一層の普及を図る。

秋山 隆（農産園芸部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2423）

ソーラー点滴かん水装置でクリ大果の収量アップ

クリ大果の安定生産には夏季のかん水の効果が高い。そこで、日射量に応じて自動かん水できるソーラー点滴かん水装置[※]を使用した結果、大果を中心に総収量が 30% 増加した。

内 容

本装置（表紙写真）は、ソーラーパネルの電力で架台上の貯水タンクへ揚水し、ほ場との高低差の水圧によりかん水する。生産者が自力施工でき、電源のないところでも自動で貯水とかん水ができるのが特徴である。

15 年生「筑波」を用い、かん水は各樹の幹部に沿って配置した点滴チューブ（かん水孔間隔 15 cm、かん水量約 0.2 リットル/孔/時間）を用いて行った。自動かん水は、果実肥大盛期の 8 月 13 日から収穫終期までとし、無処理は降雨のみとした。

結実期以降の降雨は 7 月までは多かったが、試験期間中では 8 月下旬を除き少なかった。本装置によるかん水量は晴天日で 3 mm/日程度で、試験期間中のかん水区の総かん水量と降水量の合計は 375 mm、無処理区（降雨のみ）は 241 mm であった。

収穫始期はかん水区が数日早かったが、盛期や終期には差はなかった。樹冠占有面積 1 m² 当たりの収

量は、かん水区の 3L（35 g/以上）530 g/（無処理区 450 g/）、2L（25 g/程度）310 g/（同 200 g/）、全体収量 850 g/（同 650 g/）で、かん水区が多くなった（図）。また、果実の甘みと相関の高い果実比重は両区に差はなく、裂果は両区共なかった。

以上のように、ソーラー点滴かん水装置によりクリ大果の収量は大幅に増加した。

今後の方針

本装置による好適なかん水量や追肥等の利用、経済性について検討し、技術確立を行う。

水田 泰徳（農産園芸部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2424）

[※] 日射制御型拍動自動かん水装置が正式名称。（独）農業・食品産業技術総合研究機構 近畿中国四国農業研究センターが開発

